

本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注(二)

伊藤伸江・奥田 勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることにした。

【凡例】

- 一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本(文明本)、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本(明応本)の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集 論集』(吉昌社・昭和二一)の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。
- 一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者がへん書きで「マ」と注した。
- 一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を

補った。改めた仮名遣い部分は、文字の右横に小字にて原文を示した。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【他出文献】にあげた心敬の作品集の略称は以下の通りである。

心玉集（野坂氏本）↓心玉集（野） 心玉集（静嘉堂文庫本）↓心玉集（静）

心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）↓心玉集拾遺（静）

芝草内連歌合（天理本）↓芝草内連歌合（天）

芝草内連歌合（松平文庫本）↓芝草内連歌合（松）

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

【翻刻】

梅かゝをとふ人なれや苔の庭

幽栖閑居の庭には春として人の影もなけ

れは梅のうちにほひ侍るをとふ人かと

あやまたれ侍ると也家隆の荻の上風なとをうら

やみ侍り

【校異】

梅か、―梅か香（明）幽栖閑居―閑居幽栖（明）うちにほひ―打句ひ（文）、うち句（明）とふ―問（明）家隆の―家隆卿の（文、明）うらやみ侍り―うらやみ侍る也（明）

【本文】

4、梅が香をとふ人なれや苔の庭

幽栖閑居の庭には、春とて人の影もなければ、梅のうち句ひ侍るを訪ふ人かとあやまたれ侍るとなり。家隆の荻の上風などをうらやみ侍り。

【語釈】○とふ人なれや：訪ねてくる人なのであろうか。ここは梅のよい香を、訪ねてきた人の追風用意かと思つた様。梅の香の他に、木の葉の散る音や、風の音を人音かと感じ、この語句で表現する句が心敬や宗祇に見られる。「ちるこゑをとふ人なれやならの陰／ふるき都の花のしづけさ」（吾妻辺云捨・49／50）。「とふ人なれや秋の夕風／あふことは思ひぞしるべただたのめ」（老葉（吉川本）・961／962）。「たへず吹く松の嵐の音信はとふ人なれや山べのさと」（貞敦親王御詠・山家嵐・93）。○苔の庭：山奥にある住居の苔むした庭。立派な邸宅の庭と対比される、古びてうらぶれた庭。「苔」は僧の住処のイメージを持つ。「とふ人もあとたえはつる春雨にあはれつゆけき苔の庭かな」（竹風和歌抄・春雨・315）。「松の陰明行露も玉しきのまごにまさる苔の庭かな」（草根集・秋曉露・772）。「音むせぶ山水寒し苔の庭」（自然齋発句・1640）。○幽栖閑居：俗世を離れてひっそりと心静かに暮らす住処。「幽栖閑居」は、心敬が好んだ語句であり、まためざした生き方。心敬は、歌道、連歌道を極める心は、こうした山深い草庵での生活

により生まれうると考えていた。「道に情ふかき人の中に幽栖閑居を事として、常の会席にもまみえず、世に知られざる中に、名を得たるより、もと見え侍る人、おほしとなん。」(ささめごと)。○荻の上風：荻の上を吹き過ぎて行く風。心敬が引く家隆歌は、「虫の音も涙露けき夕暮にとふ人とは荻の上風」(壬二集・秋・有心様・2996)であり、建仁二年(1202)三月二十二日に開催された後鳥羽院三体和歌会で詠出したものである。また、類似の境地としては、「あはれととてとふ人のなどなかるらん物おもふ宿の荻の上風」(新古今集・恋四・西行法師・1307)。

【他出文献】竹林抄1574、心玉集(静) 650、心玉集(野) 14、芝草句内発句16、兼載雑談、大発句帳285

【補説】『竹林抄』には「東山の坊にて正月十日比侍し会に」と詞書がある。東山の坊とは、心敬の住む十住心院をさす。『竹聞』は「十住心院での発句也」と説明を付けている。

また、兼載雑談には次のように述べられている。

一、梅が香をとふ人なれや苔の庭 心敬

日晟と云し者、心敬をそしりて専順に逢て、「此発句、てにはあしく」と申せし。順云「発句の善悪はしらず。心敬の発句、てにはのあしきは有まじき。」との給ひしとなり。

【現代語訳】

梅の香りを、訪れて来た人のたきしめた香のかおりかと思うことだ。この、苔むし古びた庭では。

ひとりわびしく住むすみかの庭には、春だからといって、訪れる人の姿もないので、梅がかおっていますのを、訪ねて来た人かと思ひ違いをさせていただきますということだ。家隆の「荻の上風」の歌などの趣向をこのもしくうらやましく思つて詠んでいます。

【翻刻】

むめの花藍よりもこぎにほひ哉

氷は水よりいて、水より寒し藍(マ)はあぬより

いて、あぬよりあをしにほひは色よりえん

ふかしと也

【校異】

むめー梅(文、明) 藍ーあひ(文) にほひー匂ひ(明) 哉ーかな(文) 氷は水よりいて、水より寒しー氷は

水より出て水より寒し(文)、ナシ(明) 藍はあるよりいて、ー藍は藍よりいて、(文)、藍よりもあいは出て

(明) あぬよりあをしーあひより青し(文)、あいよりあをし(明) ナシーと云ことく(文)、といへることく

(明) にほひはー梅の匂ひは(文) 花より匂ひは(明) 色よりーナシ(明)

【本文】

5、梅の花藍よりも濃き匂ひかな

氷は水より出でて水より寒し。青は藍より出でて藍より青し。匂ひは色より艶深しとなり。

【語釈】○氷は水より出でて水より寒し。青は藍より出でて藍より青し…本文では、「藍は藍より出でて」を「青は藍より出でて」の誤りと見て訂正した。氷は水からできるが、水よりも冷たい。青色は藍草から作るが、藍草より青い。ある物が、もとなつた物よりもすぐれて強い性質を示した時に使われ、弟子が師にまざることを言うたとえ。

「青、取之於藍、而青於藍、氷、水為之、而寒於水」(荀子・勸学編第一)が出典。心敬は『ひとりごと』で「水程感情深く清涼なる物なし」「氷ばかり艶なるはなし」と水や氷への思いを語っている。○藍よりもこき…藍よりさらに濃い。「鶯の古巢よりたつ時鳥あるよりもこき声の色かな」(西行法師家集・郭公・147)。「松の色は藍よりもこき夏野かな」(自然齋発句・885)。○匂ひは色より艶深し…梅の香は、その咲いている姿よりもいっそう気高く優美で美しい。「梅花色にとられぬにほひかな」(老葉(吉川本)・発句・1959)。

【他出文献】 ささめごと (草案本・改編本) 芝草句内発句19

【補説】 『ささめごと』は、「花を出でて花よりもこき句ひかな」と「梅の花藍よりもこき句ひかな」を並べ「作者いづれ先にか侍りけむ。不便のことなるべし。いかばかりの玄妙の句にても侍れ、以前人のをかしたる心言葉は、たゞ人の物をいひつぎたるなるべし。」(草案本)と述べ、他人の句と類想の句を作することを戒めている。

【現代語訳】

この梅の花の句いは、「青は藍より出でて藍より青し」というが、そんなふうには、花の姿よりもいつそう香氣にあふれ優美な句いであることよ。

水は水からできるが、水よりも冷たい。青色は藍色から作るが藍色より青い。そのように、梅の花の句いは、花から句い出ながら、花の姿よりも優美なものなのである。

【翻刻】

木のもと霞の山のか松かな

いかばかり年たかき木もかすめるころは末

葉はかりあらはれ侍れは小松かとあやまたれ

待るとなり

【校異】

霞の—かすみの(文) かな—哉(明) いかばかり—いか計(文、明) 年たかき—としたかき(文)、年高き

(明) ころ—比(文、明) 末葉—木末(明) あらはれ—あらはれて(文) なり—也(文、明)

【本文】

6、木の本は霞の山の小松かな

いかばかり年高き木も、霞める頃は末葉ばかりあらはれ侍れば、小松かとあやまたれ侍るとなり。

【語釈】○木の本は霞…「木の本」は、木の根元に近い部分をいう。「木の本は霞」で木の下の方は霞がかかっている様子。○霞の山…霞がかかっている山。山の樹木が霞に隠されて見えにくい。ここは「木の本は霞」という表現から、山麓から山の中腹にかけて霞がたれこめている山ということになるうか。「色うすき柳の末葉見えそめて霞の山は明けもはなれず」(正安元年五種歌合・春曙・永福門院内侍・10)。
○年高き…他よりも年をとっている。年輪を加えている。「…：わたくしの 老いの数さへ やよければ 身はいやしくて 年高き 事のくるしさ かくしつ…」(古今集・壬生忠岑・100)。「色かへてふりぬる物は年たかきとなりの松とわれとなりけり」(永久百首・隣・藤原仲実・668)。
○末葉…枝の先の方の葉。

【他出文献】心玉集(静) 643 心玉集(野) 7 芝草句内発句(野) 6 苔筵(赤木文庫本) 2126

【現代語訳】

麓から山腹にかけて霞がかかっている山の木々は、木の根元あたりに霞がかかって見え、枝先の葉ばかりが見えている。だから背の高い古木の松であっても、小松のように思えることよ。

どれほど年輪を加えている古木であっても、霞がかかる春の頃は、下の方は霞で隠されて、枝の先の葉だけが見えていますから、小松であるうかとまちがわれますということである。

【翻刻】

霞かね山のはかへすあしたかな

けしきはかりはかすみ侍れといまた初春
の餘情なれば霞えすしてもとの山のはにかへり
侍るとなり

【校異】

霞かね―かすみかね(文、明) 山のは―山の葉(文)、山の端(明) あしたかな―朝哉(明) けしきはかり―
けしき計(文)、気色はかり(明) かすみ侍れと―霞み侍とも(文) 餘情―よせい(文) 霞えすして―かすみ
えすして(文)、えすして(明) もとの山のはに―本の山の端に(明) なり―也(明)

【本文】

7、霞かね山の端かへすあしたかな

けしきばかりは霞み侍れど、いまだ初春の余情なれば霞みえすしてもとの山の端にかへり侍るとなり。

【語釈】○かすみかね…かすみきらないで。寒さが残っていて完全には霞めない様。「たまらじと嵐のつてに散る雪に
かすみかねたるまきの一むら」(風雅集・春雪・後伏見院・33)。「梢の風はかすみかねつつ／朝まだき山あきらかに
花咲きて」(宗御句抜書・23)。「かすみかね都のままの梢かな」(心玉集(静嘉堂文庫本)・642)。○山の端かへす…山
の端に取って返す。「片山陰につくる春の田／暮れぬとや霞を風のかへすらむ」(紫野千句第十百韻・42／43・宗改／
道明)。

【他出文献】心玉集(野) 122、心玉集拾遺(静) 1680、芝草句内発句18、苔蕙 2125

【現代語訳】

霞も霞みきらないで山の端にとつてかえす、そんな朝であることよ。

少しばかりは霞んでおりましたが、いまだ初春の名残りの様子なので、霞も霞みきらないままに、もとの山の端

にかえりましたということである。

【翻刻】

うくひすのこゑの花おるあした哉

朝ほらけはつとにうくひすのこゑも花やかに

侍るをきゝえたるを花といへること葉に

よりて折るとよそへ侍り

【校異】

うくひすのこゑ―うくひすの声（文）、鶯のこゑ（明） 哉―かな（文） 朝ほらけ―朝朗（明） つとに―殊に

（文、明） うくひす―鶯（文、明） 花やか―はなやか（文、明） 侍る―侍（文） きゝえたる―聞えたる（文、

明） 花と―ナシ（文） こと葉によりて―言葉によりて（文）、詞によせ侍るなど（明） 折るとよそへ侍り―お

るとよそへ侍る也（文）、よそへ侍也（明）

【本文】

8、鶯の声の花折る朝かな

朝ほらけはつとに鶯の声もはなやかに侍るを聞きえたるを、花と言へる言葉によりて折るとよそへ侍り。

【語釈】○声の花：「声のはなやかに」の「はな」を「花」にとりなした。はなやかな美しい声の表現であるが、「声

の花」と続けるのは非常にめずらしく、管見では連歌においても後代に一例しか用例がない。「沫雪はふりかかれど

も鶯の声のはなこそかくれざりけれ」（亮々遺稿・雪中鶯・21）。「ほととぎす声の花ちる五月かな」（大発句帳・宗

牧・2917）。○朝ほらけ：夜明け方。「宿近く鶯のなくあさほらけ／すそ野ぞ霞む峰の白雪」（基佐集・21／22）。○つと

に：早くから。○よそへ：たとえて。なぞらえて。鶯の声を「花」になぞらえ、そこから「花を折る」という雅やかな語句を織りこんだところが手柄であろう。

【他出文献】 心玉集(野) 15、心玉集拾遺(静) 651、芝草句内発句 14、苔庭 2128

【現代語訳】

鶯の声は花のようにあでやかに美しく、その花を折り取ってきたかのように声が華やかに聞きとれる早朝であることよ。

夜明け方には、早くから鶯の声もはなやかでございませぬの聞くことができますが、「花」と言う言葉から、花に縁のある「折る」となぞらえて詠みました。

【翻刻】

鶯を松は五葉のやとり哉

初音の巻などに五葉の松の枝にうくひすを

つくりて紫の上のかたへまいらさせ給へる事

なと侍れは五葉の松によせたり

【校異】

松は―まつは(明) 哉―かな(文) 松の枝に―松に(明) うくひすをつくりて―鶯を作て(文)、鶯をつくり

て(明) まいらさせ―まいらせ(文、明) よせたり―よせ侍り(文、明)

【本文】

9、鶯をまつは五葉(ごは)のやどりかな

初音の巻などに、五葉の松の枝に鶯を作りて、紫の上の方へ参らさせ給へる事など侍れば、五葉の松によせたり。

【語釈】○鶯をまつ…鶯の訪れを待つ。「待つ」と「松」が掛けてある。○五葉…一つのがくから葉を五本出す松の一種。ここは「いつは」と読んで、鶯の来訪を待つ気持ちを表す。「ときわかぬ五葉の松のいつはあれど春一しほのみどりをぞみむ」(雪玉集・松・4216)。「いまをみんいつはあれども雪の松」(宗砌発句並付句抜書・1907)。「かさなるは五葉の松の千秋かな」(芝草句内発句・秋のほつ句・574)。○初音の巻などに…源氏物語初音の巻で、元且に、明石の姫君を手放した明石の上から、紫の上のもとに、松にのせた鶯の作り物と共に、姫君に逢いたい思いを伝えた歌がとどけられた場面を言う。「えならぬ五葉の松にうつれる鶯も、思ふ心あらむかし」(源氏物語・初音)。正月初音の日、五葉の松に鶯が鳴く情景を詠んだ歌に「松のうへになく鶯の声をこそはつねの日とはいふべかりけれ」(拾遺集・春・宮内・22)がある。

【他出文献】芝草句内発句 21

【現代語訳】

鶯の初音の訪れを待ち、いつになったらくるだろうと、五葉の松にやどる姿を思うことよ。

源氏物語の初音の巻などに、五葉の松の枝に鶯の作り物をのせ、紫の上へさしあげなされたことなどがありました。たので、鶯を五葉の松に寄せたのです。

【翻刻】

梅さけは松かうはしき風もなし

松の葉は薫なと詩にも侍れば梅の比は

花のにほひに松の香はをされ侍ると也

【校異】

かうはしき―かふはしき(文) 松の葉は薫―松の葉薫(文)、松の原薫(明) 侍れは―見え侍れは(文、明) に
ほひに―匂ひに(文)、匂に(明) をされ―おされ(文)

【本文】

10、梅咲けば松かうばしき風もなし

松の葉は薫など詩にも侍れば、梅の比は花のほひに松の香はおされ侍るとなり。

【語釈】○かうばしき…よい香りがする。「水かすみ松かうばしき山路かな」(芝草内連歌合(天理本)・254)。「二葉よ
り雪もかうばし宿の松」(大発句帳・六九〇三・宗碩)。梅の香と松の香が交じり合う様は正徹の和歌に詠まれてい
る。「かた枝開く梅のほひもたえだえに松の香深し庭の春風」(草根集・梅交松・3007)。

【他出文献】心玉集(野) 84、心玉集拾遺(静) 724、芝草句内発句 29

【現代語訳】

梅が咲いたので、松からは、よい香りの風も吹いてこないように思われる。

松の葉は薫りがするなどと漢詩にもありますが、梅の時期には、梅の花の匂いに松の香りはおし消されますとい
うことである。

【翻刻】

散を見て花をそけなる雪もなし

雪のころはさしも花はをそけに侍とも

ゆきのちるを見侍れはさなから花のちる比に

なり侍るかとかやまたれぬると也

【校異】

散―ちる(文) 雪のころは―雪の残るは(文)、雪の残れるは(明) 待るとも―待とも(文、明) ゆきのちる
 ―雪のちる(文)、雪の散(明) 見侍れは―みれは(明) ちる比に―比かと(明) なり侍るかとかやまたれぬ
 る―成侍るとあやまたれぬる(文)、見え侍る(明)

【本文】

11、散るを見て花遅げなる雪もなし

雪の頃は、さしも花は遅げに侍るとも、雪の散るを見侍れば、さながら花の散る比になり侍るかとかやまたれぬるとなり。

【語釈】○花遅げなる：花が遅い様子の。新古今集の西行歌を本歌取りする。「吉野山桜が枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな」(新古今集・春上・西行法師・79)。「解けあへぬ水やまた凍るらむ／波にさへ花遅げなる吉野河」(新撰菟玖波集・春上・40・近衛政家)。○雪もなし：雪とも見えない。雪とも思われない。「もなし」は、心敬の好んだ表現。「否定的表現の様式をとつてゐても、実は虚無ではなく、むしろ積極的に感動の強さを示す手法」(荒木良雄『心敬』)と注目された。○さながら花の散る比になり侍るか：まるで花が散る時になったのでしょうか。「少し春ある心地こそすれ／空寒み花にまがへてちる雪に」(枕草子・二月つごもりに・藤原公任／清少納言)。

【他出文献】竹林抄 1565、心玉集(野) 94、心玉集(静) 1632、芝草内連歌合(天理本) 2543、芝草内連歌合(松) 8、吾妻下向発句草 537、大発句帳 731

【補説】この句について、宗祇作と伝えられる『竹林抄之注』は次のように述べており、句の理解の一助になる。「是は、西行の花をそげなる年にもある哉と云へる哥を引かへたる句也、たとへば、雪の春寒く降るは、花遅げなる年な

れども、雪の梢に降かかれれば、さながら花のやうなれば、花遅げにも思はずとなり」(竹林抄之注)。

11番、12番は「春雪」の風情を詠む。

【現代語訳】

雪が散るのを見ると、まるで桜の花が舞い散るさまのようだ。春になつても雪が降る年は、桜の開花は遅いものだが、そんな様子を見ると、花が咲くのを遅らせている雪だとも思われない。

雪が降る頃はやはり花は遅いように感じられますけれども、雪が散るのを見ますと、まるで花が散る頃になつたのでしょうかと、見まちがえてしまうということである。

【翻刻】

松しろし嵐や雪にかすむらん

雪にしかれてあらしやかすかになり侍る

松のしろたへにかすみかねたるほと也

【校異】

しろし―白し(明) かすむ―霞む(明) あらし―嵐(明) かすみかねたるほと也―かすみかね侍はと也(文)、

霞かね侍は、嵐や雪の底に幽になり侍と也(明)

【本文】

12、松白し嵐や雪にかすむらん

雪にしかれて嵐やかすかになり侍る。松の白妙に霞みかねたるほどなり。

【語釈】○松白し：松が雪で白くなっているさまの表現。「松しろき嵐の北は山さえて雪の南にはるる浮雲」(竹風和

歌抄・冬・733)。「にほの海のかざしにさせる唐崎の松しろたへに降れる白雪」(李花集・雪を・421)。○雪にしかれて
…意味不明の語句だが、「しかれ」を「しく(及く、如く)の未然形に受け身の「る」が付いたものと見て、「雪に追
いつかれて」の意と解しておく。○かすみかねたる…霞むに霞めない。「たまらじと嵐のつてに散る雪にかすみかね
たる横のひとむら」(風雅集・春雪・後伏見院・33)。

【他出文献】 心玉集(野) 96、心玉集拾遺(静) 1654、吾妻下向発句草 539

【現代語訳】

松が白くなっている。嵐が散り降る雪のために弱まって、雪を吹き散らすことができないので、霞みかかったように
白くなっているのだろうか。

降る雪に追いつかれて嵐が弱まってしまいました。そのさまは、松には雪が白妙に降り積もり、春霞のように
程よく霞もうとしても霞むことができない様子です。

【翻刻】

種とをき松はかすみの二葉かな

かすみの空にのこれる二葉は小松なからたね
にはあらずむかしの松なることを

【校異】

かすみの二葉かな―霞の二葉哉(明) かすみの―霞みの(文) のこれる―残る(文)、残り侍る(明) 小松な
から―松なから(文)、小松とは見えなから(明) たね―種(文、明) むかしの松なることを―むかしの松なる
事を(文)、昔の松なる事を(明)

【本文】

13、種とほき松まは霞の二葉かな

霞の空にのこれる二葉は小松ながら種にはあらず、昔の松なることを、

【語釈】○種とほき…種であった時期は遠い昔で。「種遠きは、いにしへ二葉なりし松の事也」(雪の煙)。○霞の二葉

…霞の中、二葉のように見えるということ。「霞二立也、かくれて末ノすこしみゆる也」(竹間)。「二葉」は幼い、まだ成長していない小松。「今は木高きかげながら、霞にこめられて、末ばかりほのかに見えたるに、小松のやうなれば、霞二葉と云へるなるべし」(雪の煙)。六番の句と同趣向である。

【他出文献】竹林抄 1558、心玉集(野) 98、心玉集拾遺(静) 1656、芝草内連歌合(天) 2539、芝草内連歌合(松) 4、吾

妻下向発句草 536、大発句帳 559 (一種とほきまつはかすみの二木かな)

【現代語訳】

あの老松が種であったのは遠い昔のことなのだが、今、その松も霞に隠されて、梢だけがまるで小松の二葉のように見えていることよ。

霞がおりた空に残って見えている枝の二葉は、小松のようでありながら、種(から芽生えたばかりの松)ではなく、昔からの古松であることを(詠んだのである)。

【翻刻】

天きらし散やうす雪梅の花

あまきらしは空のろうもうとうすくもり

たるなれはうす雪とも花ともわかすおほつか

なき風情なり

【校異】

散—ちる（文） うす雪—薄雪（明） 梅の花—梅のはな（文）、梅花（明） 空のろうもうと—ろうもうと
 （文） うすくもりたるなれば—薄曇たるなれば（文）、うす曇りたるなれば（明） うす雪とも—薄雪共（明） な
 り—也（文）、なるへくや（明）

【本文】

14、天あまぎらし散散るやうす雪梅の花

あまぎらしは、空の臙朦とうすくもりたるなれば、薄雪とも花ともわかずおぼつかなき風情なり。

【語釈】○あまぎらし…空を曇らせて。「あまぎらし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴にふらまくを見む」（万葉集・冬・1643・若桜部朝臣君足）。「あまぎらし散るや雲井の山桜」（心玉集（野）・67）。○薄雪…わずかに薄くつもる雪。「色紙の絵に、早梅に薄雪降りてその木にかづらかかれり」（松下集・593詞書）。「花見ても夢なりけりと身を知りて／梅散る袖に匂ふ薄雪」（応永十八年八月二十一日何人連歌・六一／六二・資興／治仁王）。「雪トアラバ、…梅…一重トアラバ、梅…うす雪」（連珠合璧集）。ここは梅の花が散るさまを雪が降るさまにたとえた。「やどごとく梅の花ちる久かたの空より雪のふるとみるまで」（玉葉集・春上・大納言旅人・80）。○臙朦…朦朧か。朦朧は薄明るい、おぼろな様子。

【他出文献】心玉集（野）20、心玉集（静）703、心玉集拾遺（静）656、芝草句内発句 22、芝草内連歌合（天）2545、芝草内連歌合（松）10

【現代語訳】

空をくもらせて薄雪かとみまがうばかりの梅の花が散ることよ。

「あまぎらし」という状態は、空がおぼろに薄明るく曇っていることなので、薄雪なのか、梅の花なのか区別がつかず、よくわからない雰囲気なのである。

【翻刻】

早川の淵もいとまく柳かな

水昇しては淵糸を巻なと詩に侍れば也

【校異】

いとまく柳かな―糸まく柳かな(文)、いとまく柳哉(明) 水昇しては―水はやくして(文)、水早くして(明) 糸を巻なと―いとをまくなと(文)、糸をまくなと、て(明) 詩に侍れば也―詩に侍ればなり(文)、詩などに見え侍ればなり(明)

【本文】

15、早川の淵も糸まく柳かな

水昇しては淵糸を巻^巻なと詩に侍ればなり。

【語釈】○糸まく：糸は柳の縁語。「柳トアラバ、糸」(連珠合璧集)。だが、一般には「柳」の様を「糸を垂る」と表現した形をとり、「柳」に「まく」は和歌や純正の連歌では他に用例がない。「はげたる太刀のつばめ鳴くころ／青柳の糸巻きまでもうちわらひ」(守武千句第一・84／85)。心敬が言うように、渦巻く淵を表現する「糸巻く」を漢詩から取り入れ重ねあわせた表現であろう。「きしかげの水のよどみのかた淵につりをたれたる青柳の糸」(夫木抄・柳・藤原知家・806)。「釣の翁のいでぬあら磯／山ぎはにたてる柳の糸垂て」(顕証院会千句第九百韻・俊喬／専順・74／75)。

【他出文献】 心玉集(野) 30 (第二句「淵に糸まく」)、心玉集(静) 666、芝草句内発句 27

【現代語訳】

早川の淵も糸を巻くように渦巻き、柳の枝も糸のように巻いてゆれていることよ。

「水昇じては淵糸を巻く」などと漢詩句に「ごいますので(このように詠みました)。」

【翻刻】

君かためおらは千もとの柳哉

餞別には柳をおるといへは也わか切なる

わかれには千もとをもおしまし(マヤ)と也南伯(マヤ)

人拳柳など也

【校異】

君かため―君か為(明) 千もと―千本(文、明) おるといへは也―おれるといへは也(文)、おれるなといへは

(明) わか切なるわかれには―我切なる別には(文)、我切なるわかれには(明) 千もと―千本(文、明) 南伯人(マヤ)

拳柳など也―南伯人拳柳東墻女扔桑などいへはなり(文)、南陌人拳柳東墻女扔桑(明)

【本文】

16、君がため折らば千本の柳かな

餞別には柳を折るといへばなり。わが切なる別には千本をも惜しまじとなり。南陌人南拳柳などなり。

【語釈】 ○千本…非常に多くの本数。和歌では桜や松に使われ、連歌においても心敬の頃に桜・松の用例があるが、柳は管見に入らない。「わがやどに千もとの桜花さかばうゑおく人の身もさかへなん」(玉葉集・神祇・北野天神・

2745)。「はつ花の宿はいそがぬ千本哉」(芝草句内発句・152)。○**餞別には柳を折る**…中国漢代に、長安の人が客を送り
 覇橋に至り、柳の枝を折り別れた風習に始まるという。楽府「折楊柳」に見える。「朝まだき折りけむ跡の露けさを
 たれわかれちの青柳の糸」(雪玉集・朝柳・467)。「帰る道をや花に頼まむと云句に／行人に春の柳を今朝折て」(竹林
 抄・旅・智蘊・940)。○**南陌人拳柳東墻女**□桑…出典未詳。

【**他出文献**】心玉集(野) 97(第二句「おらて千本の」)、心玉集拾遺(静) 1655(第二句「おらて千本の」)、吾妻下向
 発句草 542

【**現代語訳**】

あなたのために折るならば、千本の柳であつても惜しくはないことよ。

餞別には柳を折りというので(詠んだので)ある。自分がつらく哀切な思いをする別れにおいては、千本もの柳
 であつても惜しくはないということである。「南陌人拳柳」などである。

【**翻刻**】

朝鳥のかすみになきて花もなし

ろうくとしたるあした花に鳥のとやかに

なき侍る也花はあるといへるこゝろなり

【**校異**】

朝鳥の―あさ鳥の(文) かすみになきて―霞になきて(文)、霞に鳴て(明) あした―朝(文) 花に鳥のとや
 かなき侍る也―花に鳥ののとやかに鳴也(文)、霞める花に鳥ののとやかに鳴たる也(明) こゝろなり―心也
 (文)、心也只おほつかなき風情を花はなしといふ也(明)

【本文】

17、朝鳥の霞に鳴きて花もなし

朧々としたるあした、花に鳥のどやかになき侍るなり。花はあるといへる心なり。

【語釈】○朝鳥：朝、姿をあらわす鳥。「まちてつめ雪まのね芹朝鳥の水をたたく春のを山田」（心敬集・田辺若菜・106）。「さえぬる霜に降るる朝鳥／名も知らぬ垣根の木の実色づきて」（園塵・秋・689／690）。○朧々：平仮名表記「ろうろう」を「朧朧」ととらえ、本文では「朧々」と表記した。ぼんやりと霞んでいるさま。○花はある：声は聞えはするが、朝鳥の姿は霞に隠されて見えない。それと同様、花の姿も、霞に隠されてみえないが、実は花は霞の奥にあるということ。↓「もなし」については第11番語釈「雪もなし」参照。

【他出文献】吾妻下向発句草 545

【現代語訳】

朝の鳥が霞の中に鳴く声が聞こえ、また霞にこめられて花の姿もみえないことよ。

霞にこめられぼんやりとあたりが霞んでいる朝に、花に鳥がのどかに鳴いているのです。「花もなし」と詠みましたが、花は（霞の中に隠れて）あるという意味です。

【翻刻】

花落てをさゝ露けき山路かな

花ののこるまては山路に人のたえ侍らねは

さしも露のしけき篠葉にもきえうせ侍し

に花おちはてぬれば人のかけもたえもとの

こたく露のみしけしとなり

【校異】

落て―おちて(文)をさゝ―小篠(文、明) 山路かな―やま路かな(文)、山路哉(明) のこるまでは―残るま
ては(文)、残る迄は(明) 篠葉にも―篠にも(文)、笹の葉にも(明) きえうせ侍しに―消うせ侍に(文)、消
うせ侍しに(明) おちはてぬれば―落はてぬれば(文)、落侍れは(明) 人のかけもたえ―人の影もたえ(文)、
程なく人の影も絶(明) しけしとなり―しけし(文) しけしといひて、はかなく引かへて、かなしき心を顕し侍り
(明)

【本文】

18、花落ちて小笹露けき山路かな

花の残るまでは山路に人のたえ侍らねば、さしも露のしげき笹葉にも消え失せ侍りしに、花おちはてぬれば、
人の影もたえ、もとのごとく露のみ繁しとなり。

【語釈】○花落ちて…桜の花が散り落ちて。「若草高き故郷の道／花落ちて木陰をわくる人もなし」(行助連歌・2273／
2274)。「花散て後とはふ人もなければ小笹も露ふかしと也」(竹林抄之注)。○小笹…小さなササ。葉の上に露がやどる
と詠まれることが多い。「笹トアラバ、小ざゝ、玉ざゝ、をざゝが原、さゝのくまなどいふ。太山」(連珠合璧集)。
「小笹にかかる道の辺の露／小夜枕誰朝立ちて出でつらむ」(新撰菟玖波集・羈旅・大江重廣・2336／2237)。「見るままに
花にもいたく袖ぬれて／山路や春も夕べ露けき」(浅間千句第一百韻・15／16)。

【他出文献】竹林抄1641(詞書「ある山家にて侍し会に」)、新撰菟玖波集 3673、心玉集(静) 697、心玉集(野) 61、芝草
句内発句 42、芝草内連歌合(天) 2556、芝草内連歌合(松) 21

【現代語訳】

花が散ってしまうと、（やってくる人もいないので）小笹に一面露が置く山路であることよ。

花が残っている頃までは、山路に花を訪ねる人が絶えることがありませんので、あれほど露が多く置く笹の葉であつても（人の行き来に触れられて）露が消えてなくなりましたが、花が完全に散ってしまうと、人影もたえて、元のように露ばかりが一面に置いているということである。

【翻刻】

雨におち風にちらすは花も見し

花はあたにちりしほれ侍れはこそ心なき

世の無常をもすゝめ侍れもしちらぬ物にて

侍らはうたて侍へしと也かやうにいへるもたゝ

花をふかくおもひいれたる也

【校異】

おち―落（明） ちらす―散す（明） あたに―はかなく（明） ちり―散（文、明） もし―若（明） ちらぬ物

にて侍らは―ちらぬ物ならば（文）、ちらてつれなき物と^にても侍らは（明） 侍―侍る（文、明） かやう―か様

（文） たゝ―只（明） おもひいれたる也―思ひ入たる也（文）、思入たるな^{ママ}へし（明）

【本文】

19、雨に落ち風に散らずは花も見し

花はあだに散りしほれ侍ればこそ、心なき世の無常をもすすめ侍れ。もし散らぬものにて侍らば、うたて侍る

べしとなり。かやうにいへるも、ただ花を深く思ひ入れたるなり。

【語釈】○風に散らずは…風に散らないならば。心玉集（静嘉堂文庫本、野坂氏本）では「風にちらすな」となっているが、自注からも「風に散らずは」がふさわしい。「風に散る花の行方は知らねども惜しむ心は身にとまりけり」（西行法師家集・90）。「思はぬ雨の夕暮ぞ憂き／風に散る習ひは花にいかげむ」（新撰菟玖波集・雑一・荒木田守晨・2526／2527）。○世の無常をもすすめ侍れ…世の中の無常なことをも感じさせ理解させます。

【他出文献】心玉集（静）725（第二句「風にちらすな」）、心玉集（野）83（第二句「風にちらすな」）、芝草句内発句43、芝草内連歌合（天）2565、芝草内連歌合（松）30

【現代語訳】

もし、雨に落ちることなく、風に散ることもなかったならば、しみじみと無常を感じながら花を見ることもないでしょう。

花は、はかなく散りしおれてしまえばこそ、思いやりのないこの世の無常をも強く感じさせるものでございませう。もし、花が散らないものでございしましたら、ひどくいやなことでもございませう、といっている。この句でこのように「見じ」と言うのも、ただひたすら、花を深く心に思い留めているのである。

【補説】

伊勢物語の古注である『伊勢物語奥秘書』の第八十二段注に「雨におち風にちらぬは花もみぢ」と、末尾の一字を「ち」と解する形で、この句がのっている。

【翻刻】

ちる花にあすはうらみん風もなし

さしもうらめしくつらき風も散みたれたる

花に心狂して忘果てたるなり散つくして

あすはかならずうたてうらめしかるへき物

をといふ

【校異】

ちる花―散花(明) うらみん―恨む(明) うらめしく―恨めしく(明) 心狂して―心きやうして(文)、心狂

して(明) 忘果たるなり―忘はてたる也(文)、わすれ果て面白はかり也(明) 散つくして―ちりつくして(文、

明) かならず―必(明) うらめしかる―かなしかる(明) 物をといふ―ものをと(文)、物を(明)

【本文】

20、散る花に明日はうらみん風もなし

さしもうらめしくつらき風も、散りみだれたる花に心狂して忘れ果てたるなり。散りつくして明日は必ずうたてうらめしかるべきものをといふ。

【語釈】○明日はうらみん風：明日になれば、花を散らしたことをあらためて恨みに思うであろう、そんな風。「花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ」(古今集・春下・素性法師・76)。「霞みつつ花散る峰の朝ぼらけ後にや風の憂さも知られむ」(続古今集・春下・宜秋門院丹後・149)。○心狂：明応本では、「狂」は「興歎」と書き加えている。「心狂す」、「心興ず」と二通り考えられる。

【他出文献】竹林抄 1633、新撰菟玖波集 3668、心玉集(静) 694、心玉集(野) 56、芝草句内発句 44、芝草内連歌合(天)

2564、芝草内連歌合(松) 29、苔筵 2131

【現代語訳】

散る花を見ていると、あまりの美しさに、明日になったら花を散らしたと思って恨みに思うであろう風を恨むことも

忘れてしまっていることだ。

それほどもうらめしく無情なはずの風をも、散り乱れている花の美しさに心も狂おしく乱れ忘れ果てているのである。花が完全に散ってしまつて、明日には必ずやひどくうらめしいものと思うに違いないのに、ということである。

【翻刻】

月やまつゆふ暮とをき花のかけ

花のさかりなる比はくるゝ色をも忘れ侍れば

月はさこそ夕を空に待かね侍るらんと也

【校異】

まつ―待(文) ゆふ暮―夕暮(文、明) とをき―遠き(明) かけ―陰(明) さかり―盛(明) くるゝ―暮

る(明) 忘れ―忘(文、明) 侍るらん―侍らん(文)、侍る覧(明)

【本文】

21、月や待つ夕暮遠き花の陰

花の盛りなる比は、暮るる色をも忘れ侍れば、月はさこそ夕を空に待かね侍るらんとなり。

【語釈】○月や待つ…月が待っているだろうか。「神路山いづれの秋とちぎらねどわがあらましを月やまつらん」(閑月和歌集・神祇・三善時有・436)。○夕暮遠き…夕暮れになるのがまだ先と感じられる。この表現は、和歌においても、正徹と心敬以外にはほとんど使用していない。「稍もる入り日の影は消えながら夕暮遠き峰の白雪」(草根集・暮山雪・1986)。「待ちわびて草葉の末もよならむ夕暮遠き武蔵野の露」(心敬集・野夕夏草・128)。「ゆふぐれをみるや

見る人はなのかげ」(老葉(吉川本)・夕花・1986)。

【他出文献】 竹林抄 1624、心玉集拾遺(静) 1703、芝草句内発句 119、大発句帳 1340

【現代語訳】

月は、自分の出る夕暮れを待ちかねているかもしれない。花盛りの頃は、花の明るい美しさに夕暮れが遅く感じられるから。

花盛りの頃は、暮れていく辺りの情景を忘れてしまいそうですので、月は、さぞかし、空で自分が出る夕暮れ時を待っているでしょうということである。

【翻刻】

水青し消ていくかの春の雪

ふりつみしたかねのみ雪とけにけり

ちくま河春行水はすみにけり

などの面かけをうらやみ侍り

【校異】

青し―あをし(文) 消て―きえて(文) いくか―幾日(明) ふり―降(明) たかね―高根(明) とけ―解

(明) 河―川(文、明) すみ―澄(文) などの面かけ―などのおも影(文)、哥ともの面影(明) うらやみ侍

り―偏に申□(明)

【本文】

22、水青し消えて幾日の春の雪

降り積みし高嶺のみ雪解けにけり

千曲川春行く水は澄みにけり などの面影をうらやみ侍り。

【語釈】○水青し：川の水が青く澄み、清らかに流れている。ここは雪解け水が一段落し、濁流が澄んだ流れになったことを言う。「青し」は心敬の好んだ表現である。岡見正雄『室町文学の世界』第四章第二節「心敬覚書―青と景」と見ぬ師」には、「青の色こそが心敬にふさわしい色であることを想う」と述べられている。「げにも、水程感情ふかく清涼なる物なし」（ひとりごと）。○消えて幾日の：自注にあげる順徳院の歌の本歌取の語句。消えて幾日たったののだろうか。○降り積みし高嶺のみ雪解けにけり：「ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ」（新古今集・春上・春歌とて・西行法師・27）の引用。『連珠合璧集』は、「白波」の項でこの歌を例歌にあげる。○千曲川春行く水は澄みにけり：「ちくま川春ゆく水はすみにけりきえていくかの峯の白雪」（順徳院百首16、風雅集の春上、36番に入る）の引用。順徳院が佐渡に於いて貞永元年（1232）に詠じた百首歌の一首であり、百首には後鳥羽院の合点と、藤原定家の合点・評語が付される。この歌の評語には「西行法師が清滝川、うるせく仕候由年来思給候、春行水はすみにけり消えていくかの峰のしら雪、美麗の姿其隔に候ける事を誰もつかうまつらず候、おもしろく候」とあり、順徳院の作意が評価されている。

【他出文献】心玉集（野）142、心玉集拾遺（静）1700、竹林抄1562、芝草内連歌合（天）2540、芝草内連歌合（松）6、吾妻下向発句草490、大発句帳730

【現代語訳】

川の水が青く美しく澄んでいる。春の雪が消えて幾日たった雪解けの水なのだろうか。

「降り積みし高嶺のみ雪解けにけり」「千曲川春行く水は澄みにけり」などの歌の面影を願わしく思って詠みました。

【翻刻】

雪のおるさくらはあたらかさし哉

わかかさしの枝を去年の深雪の折つる

ことをおもひ合侍るはかり也

【校異】

さくらは―櫻は(明) かさし哉―かさしかな(文) わかかさしの―我かさすへき(明) 深雪―み雪(文) 事

を―事の、うたてきを(明) おもひ合侍るはかり也―思合侍る計也(文)、思ひ出し侍ると也(明)

【本文】

23、雪の折る桜はあたらかさしかな

わがかざしの枝を去年の深雪の折つることを思ひ合はせ侍るばかりなり。

【語釈】 ○雪の折る：雪が折った。雪の重みで枝が折れるのである。この語句は心敬のこの句と「雪の折かやが末ばは道もなし」(芝草句内岩橋上・90) しか管見に入らない。○あたら：せつかくの。「つま木こりかへる山ぢのさくら花あたら句をゆくてにやみる」(拾遺愚草・夕花・2166)。○かさし：髪飾り。「ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ」(新古今集・春下・104・山部赤人)。「老松の髪のかざしか若桜」(永享五年北野社法薬万句・第十三座五百韻・第三百韻発句)。

【他出文献】 心玉集(静) 668、心玉集(野) 32、芝草句内発句 62

【現代語訳】

雪が折った桜の枝は、せつかくの花で、惜しいくらいすばらしい髪飾りであることよ。

私の髪飾りとした桜の枝を、昨年の深い雪が折ったことを思い合わせましたばかりである。

【引用文献概観】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）によっている。

竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（岩波書店・平成三）

竹間：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）

兼載雑談：歌論歌学集成第十二卷所収内閣文庫蔵文政三年刊本（三弥井書店・平成一五）

ささめごと（草案本）：日本古典文学大系『連歌論集 俳論集』（岩波書店・昭和三六）

ささめごと（改編本）：『連歌論集三』（三弥井書店・昭和六〇）

自然齋発句：『宗祇発句集』（岩波文庫本・昭和二八）

基佐集（書陵部蔵斑山文庫本）：『桜井基佐句集』（古典文庫・平成七）

大発句帳：古典俳文学大系 CD-ROM 所収鈴木本

宗砌発句並付句抜書：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）

芝草句内発句：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）

新撰菟玖波集：天理図書館善本叢書『新撰菟玖波集実隆本』（天理大学出版部・昭和五〇）

竹林抄之注：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）

雪の煙：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）

A Translation and Annotation (2) of
“The 1st Volume of Iwahashi in Shibakusa-ku”
in the Possession of Honno-ji

ITO Nobue and OKUDA Isao

Shibakusa is a collection of wakas and rengas made by Shinkei. He sometimes gave his pupils the collection with notes appended by himself. Iwahashi in Shibakusa-ku, which is one of such annotated books, remains in Honno-ji as two volumes. In view of the importance of the work, Ito and Okuda tried to translate and annotate it. This paper consists of the work on the poems from No. 4 to 23 in the first volume.